

総務企画委員会会議記録

総務企画委員長 麻生 栄作

1 日 時

平成28年12月8日（木） 午後3時00分から
午後5時00分まで

2 場 所

第4委員会室

3 出席した委員の氏名

麻生栄作、大友栄二、木田昇、藤田正道、戸高賢史、桑原宏史

4 欠席した委員の氏名

志村学

5 出席した委員外議員等の氏名

議長 田中利明
委員外議員 古手川正治、森誠一

6 出席した執行部関係者の職・氏名

企画振興部国際スポーツ誘致・推進室長 中村剛士 ほか関係者

7 出席した参考人の職・氏名

大分県ラグビー協会医務委員長 植山茂宏
大分県立大分南高等学校教諭 福浦孝二
大分市中央町商店街振興組合副理事長 森晴繁

8 会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

9 会議の概要及び結果

(1) ラグビーワールドカップ2019の大分開催について、参考人から意見聴取を行った。

10 その他必要な事項

なし

11 担当書記

議事課委員会班	課長補佐（総括）	井上薫
政策調査課政策法務班	副主幹	磯崎香織

総務企画委員会次第

日時：平成28年12月8日（木）15：00～

場所：第4委員会室

1 開 会

2 参考人からの意見聴取

(1) ラグビーワールドカップ2019の大分開催について

3 閉 会

会議の概要及び結果

麻生委員長 ただいまから、総務企画委員会を開きます。

まず、私からご挨拶を申し上げたいと思います。

県議会でラグビーのワールドカップを所管しております総務企画委員会の委員長の麻生栄作でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日は、ラグビーワールドカップ2019年大分大会開催に向けまして、参考人をお迎えし、ご意見を伺うこととなりました。参考人というところがちょっと表現がよろしくないんですが、議会用語ということでお許しを願いたいと存じます。

皆様方におかれましては、年末の大変お忙しい中、しかも多忙な中、本委員会にご出席をいただき、まことにありがとうございます。委員会を代表して厚くお礼を申し上げるところであります。

お手元にお三方の名簿がございますが、私のほうから紹介をさせていただきたいと思えます。

まず、植山参考人、大分県ラグビー協会医務委員長でございますが、ご自身も大学ラグビー部のラグーマンでございまして、現在は数少ない国際大会をとり行う際のマッチドクター等々の資格も取られて、また、協会の運営等々にもご尽力をいただいているところでございます。

お二方目の福浦孝二参考人、県立大分南高校の教諭でございますけれども、皆さんご承知のように、松任谷由実さんの歌になった主人公と言われている、まさしくレガシーであります。今回の大分大会におきましても、どのような、歌となるようなレガシーを生み出したいと。また、教師という立場からも、子供たちにワールドカップについてどのようなことを、きっかけづくりとかいろいろなことにつなげていただければという思いも含めて、福浦参考人にお越しいただいて、自由にお話をいただければということをお願いをしたところでもあります。

もうお一方の森参考人は、大分市中央町商店街振興組合の副理事長でございますが、青年会議所活動等々でも、2002年のサッカーのワールドカップの際に各種活動、商店街のブースの運営とか、そういった経験も持っていらっしゃると思いますので、そういう点から、反省も含めて、今回の2019年のラグビーに向けて、どのようなことができるかというようなアイデアとか提案とかも含めてお話をいただければ幸いではないかなと、こういうふうに思っております。

本日はそういうことで、どうぞよろしくお願い申し上げます。

後ほど本委員会には、田中議長も出席をされる予定でございますので、あらかじめご報告を申し上げます。

それでは、委員、委員外議員の順に、自己紹介をお願いします。当委員会にはラグーマン2人もおりますので、その件も後ほど、自己紹介をお願いします。

〔委員、委員外議員自己紹介〕

麻生委員長 田中議長が出席されております。

〔田中議長自己紹介〕

麻生委員長 次に、参考人の皆様から自己紹介をお願いします。

〔参考人自己紹介〕

麻生委員長 それでは最初に、お三方からご説明をいただき、その後、意見交換を行いたいと思いますので、よろしくお願いします。

初めに、植山参考人、よろしくお願いします。

植山参考人 私が用意しましたタイトルは、このようなタイトルで用意させていただきました。スライドを使わせていただきますので、着座してお話しさせていただきます。

皆さんご存知のように、ワールドカップの大分開催が9月ですから、ちょうど2年と9カ月です。もう3年を切ってしまいました。

私もこういう立場ですので、ラグビー全般のことはお話しできないと思うんですが、医務に関してを中心にお話をしていきたいと思います。

ちなみにこの映像は、世界で1番有名な間欠泉ですね。竜巻地獄のイエローストーンですけど、実は私の心境は今こういうもので、どうしたらいいんだろうという、もう頭の中がおかしくなっているような状況がこういう状況です。

本当にそういう意味では、サッカーのワールドカップがうまくいくかどうかのお手本になっていますので、何とかそういういろんなところを学ばせていただいて、ラグビーもうまくやっていきたいなと思っております。

現状の私が心配している点なんですけど、こういうところがございます。

私が先般、担当はメディカルですので、メディカルの部分では、スタッフの組織づくりですね。ドクター、それから、看護師、搬送要員。何だと思われるかもしれませんが、国際試合はドクターが7名要ります。これは義務づけられております。内科医、外科医、眼科医、耳鼻科医、それから、整形外科、脳外科、それから歯科ですね。これが義務づけられております。全員そろえなきゃいけないんです。

もちろん、ここでつまらないことを強調する必要はないんですけども、大分で開催する試合で日本チームが来る確率は非常に少ないです。つまり、サモアとか南アフリカというふうには、海外のチーム同士が戦うわけですから、言語の問題が非常にハードルが高くなっております。そういうことをこなす意味でのスタッフを養成しておかなきゃいけないと思います。

看護師も要りますし、搬送要員。搬送要員は、ただ運ぶだけじゃないかと思われるかもしれませんが、2メートル5センチ、120キロの人間をぼんとは運べません。搬送の訓練が必要です。これはちゃんと決められております。どのようにしてやるかというのは。そういうことも考えて、今から養成をしていかなきゃいけないということになります。

ハード面での整備ということで、この前、私どもはトップリーグを大分県協会が何とかこなしてまいりましたが、そのときにも幾つか感じたことがあります。ドーム内の医療施設というのがないに等しい。医務室があるだけです。医務室というのは、いわゆる観客対応です。いわゆる試合をするチームの連中の保護といいますか、医療、介護に対しては、その場でいろんなものを持ち込んでやるしかないのです、非常に場当たりのようになります。これも、後でまたご説明しますが、イギリスでどういう準備があったかということもお話をしていきたいと思います。

それから、例えば、首の骨を折ったかもしれない、頭を打ったかもしれない、意識がないぞ、おかしいぞ、あるいは、これは実際に起こり得るんですけど、骨盤骨折といって腎臓が破裂したとか実際に起こっているんです、サントリーの選手とか。そういう場合にバックアップ、つまり、すぐ救急車で搬送しなきゃいけないよって医療機関をつくっておかないといけない。

ただ運ばばいいというもんじゃないんです。向こうもさっぱりわけわからないままで受け取るわけですから、ちゃんとゲームの対応ができる方、どういうことが起こったかが説明できる方というのも準備しておかなきゃいけないので、そのための組織網ですね。どういうふうに整備していくのかということ、これは私の口から言えません。大分では、例えば、2試合、3試合、4試合のどれかでしよう——の試合数が想定されます。それぞれ、1つの病院に決めておいて対応させるのか、順繰りに当番で決めさせるのかということも全く決まっておられません。

その次です。開催に向けて具体的な展望がよくわかりません。私の中にもわからないんです。スタジアム自体が、今のままで実際に対応ができるのかどうかということ。もちろん大銀ドームを使うんですけども、あれで外国のチームが2チーム来て、対応ができるかどうかということが1つ。

それから、その前の事前キャンプ等でどういうふうにどこでやられるのか。キャンプというのは、ただ遊びに泊まるわけじゃないので、そこで練習するわけですから、その練習施設ができていくかどうかということ。

あるいは、また話が戻りますが、例えばじゃ、サモアのチームとアメリカのチームが来たとします。それぞれ別のホテルに泊まりますが、これも国際ラグビー連盟から一応指示が来ているんですけど、それぞれのホテルの中には、フィットネスの設備があること、それから、それぞれ練習場がいわゆる外から見えないようにシールドされているかどうか。マスコミに——マスコミじゃない、外からスパイじゃないんですけども、秘密練習ができるかどうかということも問われています。そういう競技場、練習場が準備できるかどうかということもかかわってきます。これは私の範囲ではないんですか、そういうことも考えていきます。

今は2番目ですね。それから、3番目が、じゃ、そういったことを想定せずにぶっつけ本番でいいのかなど。その前にやっぱり1試合か2試合は国際試合を大分でやっておかないかというところが、私の頭の中にはあります。私、これは個人的な考えです。そこまで言うとおかないと、土壇場でしくじるんじゃないかと心配をしています。

それから、ボランティアも集めなきゃいけません。言葉ができる方を集めてさせるんですけども、ボランティアといっても、ただ集まってくれでは動きません。あなたはこんなことをしなさいという組織をつくって、指揮官をつくって指示をしていかないといけないという、そのスタッフの役割の明確化と組織づくりがきちっとしていかなきゃいけないんだけど、そこまではちょっと見えないんですね。先ほど言いましたように2年と9カ月と、もう時間がありません。それが私たちの懸念点です。

これは、1番下にあります日本ラグビー協会の最年少の理事をされています、ゼネラルマネジャーの岩淵さん。何人かご存じかもしれませんが、昨年日本チームがイングランド大会で南アフリカを破りました。あの1番の原動力となったのは、エディー・ジョーン

ズというオーストラリアの監督を連れてきたからですが、これは岩渕さんが人選をしました。彼は、日本代表のチームの選手でもありながらケンブリッジに留学して、ケンブリッジでもレギュラーをとっていますという方なんですね。彼がこの資料を送ってくれました。

ごらんになったらわかりますけれども、2019年のラグビーのワールドカップですが、日本で開催されるのは数十年に1回。と同時に、その次の年にはオリンピックがある。こんなチャンスは、もうまずあり得ないのではないかというのが彼の認識です。じゃ、やっちゃったらいいのか、終わってしまったらいいのかということとそういう問題ではない。その後、何かを残さなきゃいけないということになってまいります。

これは私の知人、友人と言っていいかもしれませんが、イングランドのワールドカップの日本代表チームのドクターでありました高澤先生、私は同期なんですけど、同期といっても大学も全然違うんですけど、同じ国際試合のドクターの試験を受けて、9人ぐらい取ったんだっただけ、そのときの同期のメンバーなので、大変親しくさせていただいておりますけど、彼が送ってくれたものがこれなんですけど、ユナイテッド・キングダムでのおもてなしというのは、こんなものでしたよというのを書いています。まだいっぱいありますけどね。

これはいいでしょう、こういうシーンがありました。

これはどうでもいいことなんですけど、ここにいる選手が、この前大分に来てくれたんですね。神戸製鋼の選手なんですけれども、私と同じポジションだったので、非常にこの人は好きだったもんですから出したんですけど、彼は180センチ、113キロです。私が70キロあるかないかで、同じポジションなんですね。で、これは笑えないのが、彼でさえも国際規格では決してずば抜けてはいないんです。だから、そういった連中が来たときに、医療面、けがの面でどういった対応をするかというのは、普通の想定している頭の中では、ちょっと済まないだろうなということを思います。

これもちょっと参考ですけれども、ワールドラグビー、いわゆる国際ラグビー連盟が定めた医療資格というので、私が持っているのはこの部分ですね。日本で2人ぐらいこの指導者の資格を持っている方がいます。最初、私が受けたころは十七、八人しか持っていなかったんですけど、今はもう40人を超えていますけど、それで何とかやりくりをしてやっています。

トップリーグと申しまして、二十何チームの社会人トップクラスのチームが全国で回りますね。先月、大分に来ましたけれども、それに2人ずつこのレベル2以上の資格を持ったドクターを張りつけなきゃいけないという規則がありますので、私も今週末は愛媛に飛びます。こういうことをやっていかなきゃいけないよということなんです。

これも、高澤先生から聞いて目からうろこだったんですけど、高澤先生がイギリスで何かあったときに、医療行為を行わなきゃいけないと、手当とかしなきゃいけないと、注射を打ったりしなきゃいけないときに、やっぱり医師免許が要るわけなんですよ。麻酔薬を1本打つにしても、勝手なことにはできないわけです。で、イギリス大使館に彼本人が自分でかけ合ってもらった暫定の医師免許です。こういうのを逆にこっちが準備しないといけないんです。そういうことの準備が、まだ全然進んでいないんですね。

これも高澤先生が用意してくれました、イギリスでは競技場の隣にMRIなどのこういう機械を積んだトラックが用意されていて、そこでいろんなことを、首の骨折れているん

じゃないとか、これは頭の部分ですけど、そういうのを検査できたりとかありますけれども、これが必要かどうかというのは疑問なんですね。イギリスの医療制度と日本の医療制度は違いますので、極端に言えば、大分だったら大銀ドームで首の骨を折ったかもしれないという選手を、アルメイダ病院が1番近いですね、高速を使って運ぶのに5分で行けます。こんなところでいろいろ準備しているより早いです。日本のほうがはるかに医療制度は進んでいます。

こういうのを考え合わせて、だから、向こうがやったから日本もやらなきゃいけないというのは違いますから、日本の実情に合わせたシステムづくりをしていかなきゃいけないだろうということになります。

これは中村国際スポーツ誘致・推進室長からいただいた写真ですけど、その一部を抜粋して持ってきましたけど、こういうものがありましたよという医療施設の中身ですね。こういうのがありましたということです。

これは高澤先生が、これは本当は公にはしてもいいんですけど、まだ発刊する前の彼の原稿なんですね。もうすぐ本になる原稿なんです。送ってくれたので、許可を得て出しましたが、ラグビーというのはこういうものですよと。コンタクトに伴って外傷、ほかの競技に比べて高い。ラグビーと柔道が1番高いと言われていています。もちろんボクシングもそうですけどね。

それから、年齢、レベルが高くなるほどけがが多くなりますよ。小学校のチームがやっても、そんなに大きなけがはしませんよということです。

それから、体格が大きくなったりするにつれて、首と頭をやられやすくなりますよということがあります。これは統計的に認められているんですね。

それと、ここが大事なんですけど、試合が行われるのは週末に多いと。頭の外傷とか、あるいは腎臓破裂、あるいは骨盤内の破裂とかいうのはあるんですね。あるいは心臓がとまったという例もあるんです。実際に国際試合でもあるんですね。そういうときに、通り一遍の救急病院では何ともなりませんよということになりますので、そういうことが懸念されます。

これは高澤先生の経験です。高澤先生、3年間イングランド大会に連れていった日本代表チームの合宿に、ずっとつき合ってきました。いろんなところで合宿をしています。磐田、堺、府中、宮崎——宮崎が1番長いんですけどね、こういうところでやったときに、ありがたいことに、事前に後方支援病院がきちっと手配されて情報共有がなされていたから、本当にありがたかった。そこに飛び込みで行っても、何があっても、誰かがぼきっと足の骨を折っても助かったし、頭を打っても助かったと。本当にありがたかったということなんですけれども、一方では逆に、言語や宗教、社会情勢、それから、医療水準等が異なる海外遠征。例えば、日本チームはこの前、ジョージア——ジョージアはグルジアって前は言っていましたね。

それから、フランス、イングランドで試合をしてきましたが、例えば、今はジョージアって発音しますが、グルジアなんかは治安がよくないところなので、そうそうぽんと人をどこか連れていっていいかどうかということになってきます。風邪引いて頭が痛いから、ちょっと、じゃ連れて行こうかと思ったら、襲われるということがあり得るわけなんです。日本じゃ起こり得ませんけれども、そういったことが大丈夫なのかということがあ

ります。

それから、宗教についても何も知らないだけで、イスラム教徒だっているわけなんですよ。今のイギリスのロンドン市長はイスラム教徒ですよ。私もアメリカで仕事をしたことがあるんですが、アメリカ時代の友人は何人もイスラム教徒がいました。で、家に呼んできて一緒に飯を食ったことが何度もありました。そして、宗教が違う人間の接し方というのがあります。そういうのもきちっとみんなが同じような基準で知識を持っておかないと、もう腫れ物をさわるような扱いをしちゃいけないわけですね。そういうことも考えなきゃいけませんよということになります。

となると、現地のスタッフと適切なコミュニケーションをとれる語学力だけではない、知識を持った緊急時の交渉力が必要であるということが医療上は必要です。

これはご存じのように、先月見えましたこの方ですね、日本協会のゼネラルマネジャーの岩渕さんですね。日本協会の中でも非常に影響力を持っていて、企画力を持った方です。例えば、日本チームがこの前はウェールズと戦いましたけど、ああいうマッチメイクといいますが、ゲームをどこどこやりたい、こうやりたいという交渉をするのは、全部彼が海外とやっています。それだけの力を持った人間です。

これは杉村大分市医師会長、金崎大分県ラグビーフットボール協会会長ですね。知事がいまして、私がいます。

じゃ、ちょっと話がずれます。

世界に勝つために日本人がどういったことをやったかというんですけれども、これはイングランド大会の、前回のワールドカップの前々々ですが、そのときのキャプテンだったのが廣瀬さん。で、実際のゲームのときはマイケル・リーチという、ニュージーランド、マウリの血がちょっと入っています。彼は高校から日本に来ているので、日本の国籍を取りましたから、もう日本人と言っていいんですけれども、そのときにいろんなことをやってくれたんですが、実は彼にことしの4月に大分に来てもらったんです。そのときにちょっと湯布院を案内したときの写真なんです。

非常に仲良くなって、いろんなことを情報ももらいましたが、やっぱり本に書かれている内容と全然違います。ああ、こういったこともやっぱりあるんやなというのがいっぱいありますから、そういったことを短い期間でこれからいろんな情報を、雑多ではなくて、計画的に情報を入手して、いろんなことを地方でも企画していかなくちゃいけないと思います。

これは岩渕さんが今考えている内容なんですけど、何じゃこりゃということになりますけど、勝つためにどういったことが必要か。まず、これはチームの中です。チームとか組織ですね。日本チーム全体としてのコミュニケーション、じゃ、どういった方向でチームをつくっていくのか、勝つためのチームを持っているのかというのが必要だったということを行っています。

もう1つです。もう衝突は避けられんと。中でいろいろなことがあります。例えば、50人のチームの候補メンバーを集めて、最後に残るのは31名ぐらいですかね。つまり、衝突もあるし競争もありますが、それは避けては通れないと。それだけではない。いろんなところとの交渉でも衝突は避けては通れない。これは大事なことだということを行っています。

これ、よく見てください。2021年、それはオリンピックが終わった後ですが、これに関して彼は何を考えているか。

サステナビリティとプロフィットビリティ、これは目からうろこだった。何のことかと思うんですが、これを読んでみてください。日本の代表チームを継続的に強くするシステム、つまり、ラグビーを強くするシステムのことを言っています。

もう1つ、これはびっくりしたんですけど、ラグビーで地域の活性化、もっと言ってしまうえば、ラグビーでみんなが経済的に潤うような仕組みはないんだろうかということをや彼は言っていました。つまり、日本チームが勝ってみんな嬉ばいいんじゃないよと。それである程度お金が入るようなシステムをつくっておかなきゃいけないんだよというのが、日本協会の彼の考え方なんです。これは大分に対して非常に関係あることなんです。

そのためには、こんなことがありますよとざらっと並べています。スーパーラグビー、つまり日本チームを世界のリーグ戦に持ち込んで今やっていますよね。サンウルブズというのをやっていますけど、いろんなことを考えて、こういうことを入れています。

どれも関係ありますけど、海外へ選手を派遣したりとか、ファンを開拓するのはどうしたらいいかと。メディアの対応をどうしたらいいんだろうとか、トップレベルの公式戦をどうしたらいいんだろうとか。だから、インフラの整備、スタンドの整備につながるためにどうしたらいいのかということを考えています。

これが日本ラグビーの総合的な活性化と、ラグビーを1つの糧として活性化することと、ラグビー自体を強くするという2つの目的につながるものと。

これは最後になりますけど、私どもが考えていることなんですけれども、これは医務部、メディカルの部分だけではないんですが、こういう機会に地方活性のビジネスモデルにできないかな、私はできると思います。

その理由が、ニュージーランド——ニュージーランドは人口500万人か600万人ですよ。福岡県ぐらいと言われていますが。それから、南アフリカ。それから、オーストラリア。オーストラリアでも2千万人ですかね、大きな国ではありません。スーパーラグビーというのはその地方都市を転戦していくわけです。それで十分ビジネスが成り立つわけです。ビジネスというのは、観客を動員できて、そこで潤っていくことができるわけなんです。

そこで、これは私の個人の見解です。日本人はおもてなしが得意なんです。日本人みたいにこれほど気働きができる民族というのはないわけなんです。アメリカ人なんかひどいもんです。もう言ったことしかしてくれません。気を回すことができるのは日本人だけなんです。これが外国に浸透すれば、これほど安全で快適な国は世界中にないんです。これは海外を見られた方は皆さん同じことを言われると思います。世界中にないです。

ただ1つの問題点は、日本人の外国語恐怖症です。これなんです。英語が通じないこと、頭の中が真っ白になると。英語で話しかけられると真っ白になる、こんなことはないわけです。私も英語は全然得意じゃないんですけど、海外で何年か暮らしたんですけど、外国では、言葉がすぐ通じないことは当たり前なんです。当たり前になれてくれりゃびっくりしないんです。ボディーランゲージでも何でも構わない。別に彼らは盗人でも盗賊でもテロリストでもないわけですから、ボディーランゲージでも何でもいいわけですから、通じればビジネスとして成り立つわけなんです。というのが私個人の考えであります。

これで私は終わりなんですけれども、まだ私、ラグビーをやっています。これ、残りはこの連中は大分大学の学生です。私これ、最後走っていわゆるプレゼントトライといって、最後に植山さんに回せと言ってボールもらってトライさせてもらっていた。ことしの3月の写真です。何とか走っています。

これは有名なグランド・ティトンといって、毎年8月の終わりにジャクソンホールというところでFRBの議長が来ては発表しますよね。アメリカで1番きれいな風景と言われていますが、毎年アメリカの大統領が来て、ここで避暑、つまり夏休みをとります。毎年とります。人口8千人ぐらいの町です。私もここが好きで二、三回行ってはいますが、こんな気持ちでワールドカップが迎えられれば、さっきの間欠泉みたいなのが頭の中をぐらぐらするんじゃないかと、うまくいけばいいなど。後でお話が聞けるであろう森参考人みたいに、きちっとサッカーのワールドカップみたいにできればいいなど思っているところです。

飛び飛びの話をしてきましたが、以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

麻生委員長 ありがとうございます。

続きまして――あれ、音楽はかけるの。松任谷由実さんのノーサイド、後ほど皆さん、曲を聞いてください。

それでは福浦参考人、よろしくお願いします。

福浦参考人 植山参考人の後で、これぐらいしっかりと準備をしてこなくちゃいけなかったのかなという気に、今なっております。私は今現在、ラグビー協会の役員もしていませんし、これといって何かラグビーに携わってということもないので、その辺も少し気が引けるんですが、現在までの経験なりをちょっと話をさせてください。

私は、舞鶴高校に入学をしてラグビーを始めました。3年間なかなか厳しい練習の中で頑張って、3年生のときはキャプテンをやらせていただいたんですが、ちょうど私の1つ上の先輩のチームがすごく強くて、花園大会に行く前のミーティングで監督が、もう優勝するのはことししかない。ことしがチャンスというふうに私が2年のときにミーティングで言われまして、そのとき、私たち2年生は、ああ、もう来年はだめなんだなど、もうそういうふうな宣告を受けた記憶があります。

1つ上の先輩は、たまたま全国が強くて、久我山が優勝したんですが、久我山が当時、史上最強のフォワードを擁して圧倒して優勝したという時代で、残念ながらベストエイトで秋田工業と引き分けの抽せんで敗退ということで、勝てばベストフォーの3位、銅メダルをもらえたんですが、それはかなわなかったと。

それを引き継いで私たち、新人戦に臨むことになったんですが、新人戦、監督の期待どおりというか、予想どおり、我々当時の舞鶴は九州大会では優勝するのが当たり前と、黄金時代を迎えておりました。我々もちろん九州大会は必ず優勝、全国大会はベストエイトがノルマと。それが基本設定で臨んだ新人戦の九州大会で、まさかの沖縄代表のコザ高校に準決勝で破れるという失態を演じて、新聞でもかなりたたかれました、その当時。前途多難というふうなタイトルで書かれておりました。

これはどうなるかなというふうな心配をしておりましたが、夏の県高校総体の上の九州大会のときは、何とか優勝を勝ち取りまして、その結果、全国大会ではシード権をいただ

きました。第6シードでした。で、花園に出場することになりまして、いざ花園に行って、1回戦、2回戦は勝ち上がったんですが、内容としてはさんざんな内容で、かろうじて勝ったというようなことで、次、準々決勝、久我山とやりましたが、そこでは多分、もう我々選手もそうでしたし、周りも、ベストエイトまで行ったからよくやった、ことしのチームはよくやったなというような結果で、負けるだろうというところを、見事ひっくり返しまして、勝ち上がって、その勢いで準決勝を勝ち、決勝まで進むことができました。

決勝には進んだんですが、実は私、当時、大学の推薦入試の2次試験が決勝戦の日と同じ日でありまして、鹿屋体育大学なんですけど、その年に開校ということで、1期生として入学すべく推薦入試を受けました。2次試験が同じ日ということで、花園出場が決まった後に、当時の監督に、実は決勝の日と試験日が一緒なんですけど、試験に行ってもよろしいですかと言いましたら、「ああ、いいよ、行けよ」と軽く言われまして、「はい、わかりました」と、自分の将来が大事なので試験に行きなさいということを言われました。

まさか監督も、私自身もそうですが、決勝まで上がるとは思っていませんでしたので、そのぐらいの感覚だったんですが、いざ準決勝を勝ちまして、決勝に出るとなったときに、私自身はもうラグビーは15人でやりますから、15分の1が欠けても、もちろんリザーブの選手が入って、3年生がいますので、戦力的に何か落ちるとかいうことはありませんので、特に心配はしていなく、そのまま大阪から鹿児島のように飛んだんですが、たまたま全国大会の決勝に出るチームのキャプテンが、大学入試で出場できないということが全国でニュースになりまして、それを知ったいろんな関係の方から、大学のほうにどうかならないかというふうな問い合わせがかなりの数が来たということで、ちょうど1月5日が準決勝で、7日が決勝だったんですが、私は5日に行って、6日の午前中に大学の事務局の方が来られまして、ちょっと大学の事務に来てくれという話で、推薦入試の件で、緊急の教授会を開いて、決勝に間に合うような時間で入試を行いますということが決まりましたというようなことを聞きました。

朝6時から入試を受けまして、9時半の鹿児島空港発の飛行機で大阪入りをしまして、1時のキックオフに間に合ったというふうな経過で決勝に臨みました。

で、そこまでもかなりドラマというか、私の中でもすごいなというふうな感覚であったんですが、その後、いざ試合が始まりまして、相手は奈良の天理高校で第4シードだったんですが、我々が決勝に上がったのは第4と第6シードの2チームが決勝戦を戦って、じゃ、第1、第2、第3シードはどうなったかという、ノーシードに負けたりとかして、我々の年は前の年とは違って戦国時代で、ある意味決勝戦のカードを見ると、どこが上がってもおかしくないぐらい、全国レベルは接近をしていたというふうな結果だと思うんですが、で、天理と対戦をしまして、試合の中で押されながら展開はしたんですけども、12対12、引き分けのまま後半20分ですかね、天理にトライを決められまして、当時はトライが4点でゴールが2点、今は5点の2点ですが、4点の2点で、それで18対12というふうになっても、後半30分、試合がタイムアップのロスタイムに入って、ここで試合はもう終わるだろうという誰もが思ったときに、たまたま相手の最後のプレーでミスが起きまして、相手の選手が蹴り出そうとしたボールがミスキックになって、うちの選手がとってトライをする。そこで4点加えられて、18対16と。あと2点。で、ゴールが決まれば同点で、ラグビーの場合は決勝戦だけ、同点の場合は両方優勝というふう

な決まりになっていましたので、優勝を勝ち取れるチャンスがめぐってきました。

私は、そのときキッカーを任されていたので、最後の同点ゴールを狙えるという立場にありまして、そのキックを蹴り終わったら、もうノーサイド、試合終了というふうなこともわかっていましたので、これを決めれば優勝だというふうで、先ほども話したように、それまでの流れが舞鶴にとっても私にとってもついてるといえるか、そういう流れで来ていましたので、私自身は当時、ああ、このキックは入るなというふうに確信をしておりました。

入って同点ですごい結果で終われるというふうに思っていたんですが、そんなに甘くはないということで、実際、キックを蹴りまして、僕は外してしまいました。18対16でノーサイドで、それでも春の九州大会でとれなかったチームが最後、全国で準優勝できたということで、すごいいい思いをさせていただきました。

ここまでの経過はそういう流れなんですけど、その後にもまた、先ほどの麻生委員長からありましたように、歌の話が出てきて、これはたまたまその決勝戦を見ていたシンガーソングライターの松任谷由実さん、ユーミンがノーサイドという曲をつくりました。

当時、私、高校3年生卒業前の3月にTBS系のドキュメンタリーの番組取材を受けておりました、そのときに来られたディレクターの方が、実はこんな話があるんだよというふうに、ユーミンがああ試合を見て曲をつくっているらしいみたいな話を聞きまして、それが3月で、実際に12月にアルバムの「NO SIDE」が出たんですが、その曲が、まさにその場面を切り取って歌詞にしているなというふうなことで、ただ、直接、例えば本人からとか事務所からとか、こんな曲をつくれますよとか出しますよというような話があったわけではなく、伝え聞いた話で実際、私は知ったんですが、その後も、ノーサイドの話は実際に松任谷由実さんの関係のところから何かがあったのではなく、周りでテレビ局とか新聞関係とかが何かあると、ノーサイドという曲は、あの人モデルになっているらしいって、もう本当にらしいのグレーゾーンで進んでずっと来ていました。もう二十年ずっと。

だから、取材を受けると、あのモデルですねみたいな話で私は受けていたんですけど、それがちょうど5年ぐらい前に、朝日新聞さんのほうが新聞の特集で、ある1曲を突き詰めて掘り下げて、その曲の背景とか思いとかそういうのを新聞で特集をするのを何回かやっている。それにたまたまノーサイドが出るようになって、その取材の中で、実際に松任谷由実さんにも取材をして、言質をとってきたというふうな話で、そこで明らかに、ついにグレーなところが白になったというふうなことで、今はもう、一応モデルとしては確定をされたのかなと考えております。5年ほど前に。

そんな流れで、私の人生、ラグビーのおかげでいろんな、きょうこの席に来られているのもそうなんですけれども、特に何かをしているわけではないんですけども、その話で私の人生もプラスに働いていることが多かったなというふうな気がしております。なかなか高校現場にいながら、高校のチームを見たりとか、高校の何かに携わっているという機会がないまま、もう現在を迎えております。

現在、私はジュニアの小学生のチームを2006年に立ち上げまして、そこの監督として今、小学生を教えています。大分舞鶴クラブブラックスジュニアというチームをつかって、週に1回、日曜日に練習しておりますが、立ち上げた当時は、やっぱりラグビーと

というのは、私がやっていたころは本当にラグビー全盛期で、国立競技場の観客動員数最高記録をつくったのが早稲田対明治の早明戦で6万9,999人という、いっぱいいっぱい、もうそれ以上計算できないというところの記録を持っているのがラグビーだったんですね。そのぐらいの時代から一気にもう今、ご承知のとおり、ラグビーワールドカップが強い関係で少し盛り返していますけれども、それでも、もうラグビーというのはマイナーなスポーツで、全く子供たちが目を向けてもらえないような環境にあります。

私が始めた2006年当時、ちょっと声かけをしても、最初はもう本当、5人とか6人とか、ラグビーの関係者の子供が集まって、ちょっと一緒にボールで遊ぼうかぐらいの感覚のチームでしたが、それから少しずつふえていきまして、去年の頭ぐらいに四十数名の加入のチームになりました。

ただ、その後、例の、さっき写真が出ましたが、南アフリカに日本が勝って、やはりメディアの力はすごいなと思ったのは、去年のスタートが四十数名だったのが、ことし今、73名の登録となり、一気にふえました。

やっぱり子供たちもラグビーの日本代表が、ああいうふうにメディアにどんどん出てきて、活躍して、ああ、ラグビーってすごいかっこいいなっていう、子供心に思っ、親もやっぱりラグビーやらせてみようかなというような感覚になるんだろうなと思うんですよ。そこから、じゃ、ラグビー調べてどこかやっているところはないかなというところで、問い合わせがあって加入をするというようなことで、ラグビーが復活するきっかけの1つは、やっぱりそういうところなのかなというのを、昨年、すごく感じました。

今回の大分で開催をされるワールドカップですが、やはり今、ラグビー人気は、去年に比べると少し下火にはなっていますが、まだまだ影響力はあると思っていますので、このラグビーワールドカップを大分ですることによって、それに向けて、子供たちあるいはその子供の親に対して、何か具体的なアプローチ方法は、私もなかなかすぐには思いつくものではないんですが、アプローチができれば、ラグビーが大分県のメジャーなスポーツの1つとして成り立っていけると思います。実際にそういう子供の加入率を見ると、そういうふうにあります。

1つ、小学校を私は見ているんですけども、どこに行っても、問題視されているのが小学校から中学校に上がったときの中学校の受け皿がないというのが今、大きな問題にラグビーの関係者の間ではなっております。

昔は中学校に部活としてのラグビー部もあったんですが、もう今、全くありません。クラブチームで大分市内が2つと、あと、玖珠、別府と臼杵ですかね。人数が少ないところでいえばありますけれども、ほとんどないような状況なので、小学生が中学に上がったときに、中学になると部活動が始まりますので、そっちのほうに競技として流れてしまう。そのつながりができると、高校は一応チーム数があるので、受け皿があるのかなと。そのところの流れが中学で切れてしまうのが、ちょっと大きいかなと。そこは行政の力なりでどうにかなるといいかなというふうな気はしております。

あとは、ハード面、グラウンド施設の関係で、やはり芝生のグラウンドで子供たちがやると、ラグビーに限らずですけども、やはり安心してできるし、楽しいし、やっぱり土のグラウンドとは全く違いますので、そういったところも充実、これを機会にできる場所がふえるといいなというふうな気しております。

最後に、先ほど植山参考人も言いよりましたが、やはり2021年というか、ワールドカップが終わった後、いかに継続してラグビーをやってくれる子供たち、それから、競技力の向上がどういうふうによればいいのかというのはあれですが、つなげられるようなこれからの、あと残り2年9カ月とっておりましたので、その先につながるような何かシステムなりがあると、ラグビーをやってきた者としてはとてもありがたいし、そうやってほしいなというふうに感じております。

大した話はできませんでしたが、以上で終わらせていただきます。（拍手）

麻生委員長 ありがとうございます。

続きまして森参考人、よろしくお願ひします。

森参考人 よろしくお願ひいたします。森でございます。

最初にお断りさせていただきますが、今、植山参考人、福浦参考人、お2人ともラグビー一経験者ということでございましたけど、私は完全な見たとおりの感じで、スポーツといえはざっと剣道はしておったんですけども、それも個人で、チームスポーツというのは経験したことがない人間です。

それで、お二人とも、それこそスタジアムの中でのあの熱い経験を今、語っていただきましたけれども、私はこの2002年のときに完全にスタジアムの外でした。当時、ビッグアイですよ。ビッグアイの中には、1歩もあのとき足を踏み入れることはありませんから、前後はもう毎日のように実はビッグアイに行っていたんですけども、全く足を踏み入れることはなかった。

2002年の当時から、今言いましたように、私はサッカーのことはわかりませんというのをあえて言いながら、おもてなしをという話をさせていただいたこと。それと、サッカーをやる人間だけのためのワールドカップではないということも、あえてそのときからずっと言い続けてまいりました。まさに県を挙げての大事業が、あのとき本当にすごい疾風怒濤で大分中が沸き上がったわけですけど、それがまた今回の2019年にまた来てくれるといいなと、そう願っておりましたので、きょうここにお呼びいただいたことは、本当にありがたいと思っております。それを少しお話しさせていただこうと思ひます。

もう本当にとりとめもない話で、お時間は15分いただいておりますけれども、取り組みについては、実はもう1994年からサッカーのワールドカップに関してはスタートしたんです。ですから、話したいことを断片的に頭の中を枝葉だけで書いていますけど、いっぱいありまして、到底15分でお話しできません。ですから、大きく2つ、2002年に何があったのか、そして、その2002年のまさにレガシーが今、大分の中にどういうふうに根づいていて、それが2019年にどういうふうによればいいのかというところだけ、お話しできればいいかなと思ひます。

これは、写真をちょっと、あえてこの画面、パワーポイントを広げません。このままでござんいただきます。

私ども中央町商店街のフォーラスさん、トキハさんの前のスクランブル交差点を渡ったところから若草公園の手前まで長さ150メートルございます。東西のアーケードに人がぎっしり、もう本当に隙間がないほどの人で埋め尽くされました。こういった経験を2002年に至るまでの間に4回経験してまいりました。4回こういうふうによれば全体が人で埋め尽くされるという経験。そして、サッカーというか、モニターにくぎづけになって大

分を応援する、日本を応援する、大分にワールドカップを呼ぶんだという機運が、もう助走が始まっていったんですね。

何年になりますか、1998年がフランス大会でしたかね。そのときの状況もこういった形で、埋め尽くされておったわけです。何が来るのかというのか、実は大分に何が起こるのかという経験なかったわけですよ。それから、スタジアム自体がないという状況でしたので、一体このまちに何が起こるのかという、そういう戦々恐々とした気持ち、危機感にかえてみんなが集中して一丸とならないと、これだけの大事業はできないんじゃないかということを奮い立たせたんじゃないかなと思います。

先ほど言いましたように、94年に、これは青年会議所の中にスポーツ文化推進委員会というのと子供育成委員会という委員会が立ち上げられたんですね。先ほどお二人の参考人もお話しされておりましたが、ラグビーを通して地域の教育であったり文化であったり産業であったりという、いろんな派生効果を生むのが地域にとって1番の宝物として残るものなんじゃないのということは、2002年当時も言われておりました。

青年会議所というのは、若い40歳になるまでの青年、企業関係に勤めている人間がやる団体なんですけれども、その中でも、やはりスポーツ、文化、子供育成というテーマでサッカーをどう展開していくかという話がございまして、私もちょうどその前後から在籍したものですから、もうどっぷり、青年会議所卒業までの間はワールドカップを1本でずっと過ごしたんですね。

きょう映像あるんですけどね、ごらんいただきたいものがいっぱいあって、ちょっと話が断片的になりますけれども、どこからお話ししましょう。

そう、ワールドカップが来るぞっていう話をいただいたときに、まずそのときに、どういった形でおもてなしすればいいのかと。我々商業関係者というのは、大抵何かイベントがあるといえば駅前に面している商店街なものですから、その地域で起こるイベントには、必ずかかわるといふ心構えはできておるわけですが、何分情報がなかったんです。

そのため、青年会議所の情報、それから、各方面からいただく、断片的にワールドカップというのはどういうことが起こるんだろう、フランスに大会を見に行ったらこんなことをやっていたぞというようなことをたくさん仕入れながら、じゃ、まず第1回目なんだから外国でやっている大会のまねごとでもいいじゃないか。同時にやらなきゃいけないこと、大分で1番そういう全国の目が集まるような体験というのは、国体だったんじゃないかと思うんですね。大分国体が昭和41年に開催されたということで、私が生まれた翌年ですけども、そのときに体験して、地域を挙げて国体を盛り上げていこうとしたおじさんたちのお話を聞いたりしながら、まちぐるみのおもてなしということを勉強していきました。

とにかく、そのスタジアムの中では、すごい熱い試合が繰り広げられるわけですが、あのスタジアムからバスで大分駅前まで戻ってきて、そして興奮冷めやらぬまま宿泊施設にそのまま戻ってもらうのはもったいないですよ。とにかくまちでたくさん時間を滞在してもらって、地域の私たち大分県の人と触れ合ってくださいということを、どういう仕掛けをつくれればできるだろうかということで、たくさんの仕掛けを設けました。

今出たのは、若草公園の会場ですね。それから、これは駅前でイベントでムードづくり、これはそれこそ、この今出ている映像は、ビッグアイにワールドカップが来る——私が今ちらっと映っていましたけど、大分で前の年です、2001年の様子です。もうこのとき

既に来年ワールドカップが来るぞ、来るぞというイベントのムードをつくっていくということをしていきました。で、地域をきれいにすると。

フリーガン対策、これは今、フリーガン対策で大分が何かとんでもない目に遭うんだということで、警察からいろいろご指導いただきまして、商店街の中に鉄条網を張ったりとか、アーケードの梯子を固定して、勝手に上に上がっていけないようにするとかいうご指導までいただきながらの厳戒体制で、という動きもありつつ、だけど、そういう構えた状態でお客様を招いても、ちっともくつろいでもらえないでしょうということで、青年会議所と商店街ともう完全に民間ベースでタッグを組みまして、おもてなし広場ということで開催いたしました。

ちょうど今出てきたのが夢広場という名前で、何と無謀にも、みんな仕事をしている人間でありますにもかかわらず、10日間のロングランで、毎日1日も欠かさず、竹町商店街のガレリアドームですね、広場の中に、あの空間前後をイベント会場にしておもてなしをしていったと。

とにかく試合が3試合がありましたけど、やはり外国の方って試合を見るだけじゃなくて、前後にたっぷり滞在して、訪ねてきた地域をベースにしながらか、試合会場をベースにしたり、1つのどこか地域をベースに拠点を持って、試合を転戦して見ながら周辺の地域も観光していくというような楽しみ方をするようにして、大分に、もうこのとき今まで見たことないぐらいの外国人の人たちで埋め尽くされましたですね。

後にも先にも、あの2002年を超えるような外国の人が集まった経験というのは、今年度の2019年が第1回目になるんじゃないかと。あのときの再来になるんだろうというふうに思って、今は身構えているところなんですけど、これなんかは、まさにビッグアイの周辺の地域の方々ですね、バスをおりた瞬間に、こうやって地域に花があったらきれいでしょうということで、いろんな活動をされたりとか、キャンプ地周辺で、それこそ中津江の坂本村長さんのように、もううんと、スタジアムから全然遠く離れた地域の人、もう県内全体がやっぱりワールドカップに包まれていたというのは、いい経験をさせていただきましたし、無償の奉仕というか、何でしょう、もう自然に、だってこれだけの大きなお祭りが来るんだから、みんなで迎えるのは当たり前でしょうというムードがああときにでき上がっていたのに、すごく私は感動しました。

我々はどちらかというと、イベントを使って地域で商店街がどうとかいうふうな、何かちまっとした話を持ち込みがちなんですけど、全く関係ない人たち、ワールドカップサッカーにも、それから地域づくりのスポーツにも全く興味がなくても、まち全体が一丸となって人を迎えられたという経験ができたことを、今すごくいい経験したなど。

これは、おもてなしカラーで大分市がそのとき使ったんですけど、まち中がこのブルーとオレンジに埋め尽くされました。そして、ちょうど私の母校でもあるんですけど、荷揚町小学校の全生徒がこのフラッグに絵を描きまして、外国の人に、いらっしやいであったりとか、将来の自分の夢を描いてみたり、思い思いに旗にいろんなメッセージを込めたフラッグをつくりました。

このとき、在校生は多分もう300人ぐらいに減っていたんですけど、1人1人のそういう思いが込められたフラッグが、このとき完成したんですよ。

実はこれには伏線がありまして、私ども青年会議所が当時やった活動は、先ほどお話し

しました夢広場ということで、ガレリアドームでお客さんたち、大分に来た人たちをおもてなししようというイベントのほかに、タイムカプセルもつくりました。

このタイムカプセルの設置の担当委員会を、私はやっていたものですから、このときにもいろんな経験をさせていただいたんですけど、先ほどこちらでござんいただきました荷揚町小学校のフラッグ、それから、大分県内の商業写真家の皆さんが、このワールドカップ期間中に大分で起きた記録を、県内各地で写真で撮り集めました。期間中に大分でどんなことが起きたかという記録写真が膨大に残っているんです。

そういったデータを、実は全てこのタイムカプセルに封入してありまして、このカプセルは、今、大銀ドームからちょっと離れたところに多目的広場ということでリレー・フォー・ライフですかね、毎年夜を徹して歩くイベントがありますけど、ああいった会場に使われている多目的広場の脇に設置されております。

これは、1970年の万博のときに、やはりタイムカプセルをつくったという話で、未来に何かあのときの熱い思いを残すためには、形として見えるものをつくろうと。地面に埋めてしまったら何も見えないのでということで、こうやって地上設置型のタイムカプセルで、時間的に50年、100年でも耐えられるような窒素を封入して、中のものが劣化しないような構造で保存してあります。

これ、つくったのはいいけど、いつ中に入っているお宝をあけるのということをとときき言われるんですけども、もしかすると、僕はこの今、あのときこんな経験したよねっていうことで、例えば、来年でありますとか、18年でありますとか、しかるべきタイミングに、これだけのことで大分中の人たちが動いたんだよと引っ張り出されたら、多分この小学生たちも、もうあれから15年、16年たっています、大人ですよ。成人していますし、いろんな活動をした人たちが1人1人、そうか、じゃ、もう1回ラグビーワールドカップのためにというようなアクションが起こるんじゃないかと密かに願っております。

そのときには、今言ったように、地元だけじゃなくて、会場に来られた、外国から来られた方々もたくさんメッセージを描いていただいて、タイムカプセルの中に封入してあります。もしこれを何かいい形で、ただあけて中にこんなものありただけでは何も勢いづかないかもしれません。何かストーリーを、あのときの熱い思いをきれいな物語としてきちんとつくって、そして、みんなの前に提示することができたら、すごい起爆剤になるんじゃないかと思ってひそかに願っているところです。

おもてなし広場のところに関しては、もう繰り返しになりますけど、こういうふうに関連日です。毎日餅つきしたんですよ。試合のたびに外国人の人たちはすごく喜んでもらえました。お餅つきに参加していただいて、一緒にこねて、一緒に食べるというタイプ。言葉も何も通じませんが、笑顔と一緒に作業をするという経験が本当にこんなにいい交流を生み出すんだということで、もう感動しまくった日々でした。

このときのイベント、先ほどのステージがあった、この忘れもしません2002年の6月13日でイタリア対メキシコの試合の日、この日、会場に私はおりましたが、私、くしくもその日、誕生日でございまして、ステージに連れて上がられまして、聞いたことないメキシコの言葉のバースデーソングをみんなで歌っていただいたという、人生最大の、最高の誕生日祝いをいただいたという経験が、今でも記憶に新しいですけどね。

こうして、きょうもこうやってしゃべれるのは、そういういい経験をさせてもらった人

が、多分2002年のときにたくさんいます。大分県中におります。そういう方々にもう1度何かやってみらんという話を、ぜひ1日も早くやっていただきたい。

そうすることによって、きっと大分はまたおもしろいことがいろいろ、多分、あの経験がありますので。先ほど植山参考人が2年9カ月しかないっておっしゃいましたけど、スタジアムの外のおもてなし体制は、2年9カ月あれば必ず持つていけると思います。スタジアムの中で試合をいかにということに注力していただいて、あと、我々も含めて、及ばずながら民間がおもてなし体制づくりということに関しては、それから重ねるように、2002年の経験がベースになって、例えば、直近では昨年のデスティネーションキャンペーンでありますとか、OPAMが完成したとか、2018年には国民文化祭が参ります。

そういったものに対しても、そういう全国単位の大きなイベントが来る、よっしゃ、来てみろと。そういうふうな形で思えるのは、この2002年のときの経験が、今まだ生きています。そして、地域の中でもその受け入れ体制が整ってきておりますから、きっといい形のラグビーのワールドカップがお迎えできるんだらうというふうに確信しています。

もう最後になりました。お伝えしておきたいことも、皆さん今、お二人の参考人がお話ししてくれたので、もうこの辺は簡単にさらっと。何か形に残すもの、それから、スポーツとしての大きな祭典ということを超えて、やっぱり県民全員にとって大きな記憶遺産にしていかなきゃいけない。そのときの経験が、先ほど言いました次の原動力になるような組織づくりであるとか、そういったことにも必ずなっていくんだらうなというところでやっていけたらいいなと。

ここでお願いすることが、実は2つありまして、先ほど少し言いましたけど、外国の方をお迎えするのですから、やっぱりフレンドリーな形でお迎えしたいと。規制規制で縛られることなく、どうぞオープンに民間の力を信じて、ここにはいらっしやらないわけですけど、警察当局の方々にも安心して外国の方をお迎えできるように協力していただければなということ。

それと、1つ全く見えていないのが、2002年のときにFIFAの存在が、正直申し上げてすごく大きな障壁になりました。1つ1つ決め事をするときに、大変厳しい制約を受けました。ワールドカップのロゴは使えませんですし、マーク、ライセンス、それから、ワールドカップを彷彿とさせるような言葉の言い回しでありますとか、すごい細やかに指導いただきまして、県に相談しても、県はそれを中央に相談し、中央は国際組織にということ、1個1個決め事にすごい時間を費やしました。今回のラグビーのワールドカップがどういう体制で行われるのか。

それから、がちがちのスポンサーイベントが展開されましたよね。あれは多分、オリンピックと同じぐらいの勢い、もしくはラグビーのワールドカップのほうが、もしかしたらそういう商業ベースは激しいのかもしれませんが、私ら民間が使うときに、すごい制約を受けました。この辺の掌握ですね。ラグビーのときにはどうなるのか。これが可能でありましたら、来年中にでもどういう形で民間がかかわれるのかという基本的なスキームだけははっきりしていただかないと、手も足も出ない。このときもすごく言われたんです、ライセンス問題。

それから、パブリックビューイング1つにしましても、放送権でありますとかスポンサーの権限でありますとか、その辺でかなり大きな制約を受けましたが、たまたま青年会議

所と商店街は民間であるということ、完全に商業ベース抜きだよ、おもてなしに徹するんだよということで、片目をつぶっていただいて、たくさんパブリックビューイングを展開することができました。

だから、その辺のところ、可能な限り、後々に何もわだかまりを残さないような形でやっていきたいなという点を、ここでお願いしておきます。

もう1つ、済みません、長くなりますが、おもてなしの玄関で、私どももずっとアーケードができたときから、まちは舞台だということをテーマに活動しています。私たち商店街人が、まちで何かを見せるとか出すんじゃなくて、商店街っていう空間もしくは町なか全体を市民、県民の人たちが、自分たちの表現とか思いを伝える場として使ってもらおうということを1番の目標にしておりまして、この言葉もアーケードができましたら1996年当時は何か上滑りしておったのですが、ワールドカップを経て、昨今ではもう当たり前のように定着しています。小さなイベントでありましたり、それこそ個展1つやるにしても、もしくは週末イベント1つするにしても、市民、県民の人たちがすごく自分で楽しい空間として利用してくれております。

ですから、今度の19年は2002年よりもさくっと何か起きます。何かぼんといひ石が投げ込まれていい波紋が起きたりすれば、すごい勢いで広がっていくんじゃないかということを感じております。

あとは、そうですね、この前のトップリーグですか、あのときに、バスの発着場が駅南からということでした。その日はちょうど大分市では中央通りで歩行者天国を展開しておったんですけれども、残念ながら、あのたった300メートルぐらいですけど、あの距離の中で、試合が終わってまちに戻って来られた方が何か感じられるかなと思って、そこを注目していたんですけど、残念ながら連携がうまくいかなかったんです。ですから、駅南に拠点、バスの乗り降りですね、それが本当に必要かどうかの検証も、できましたらお願いしたいです。

ワールドカップのときは、ちょうど今、駅ビルの北側の空間ですね、今、長距離バスの発着場になっていますが、あそこがシャトルバスの発着場になっておりました。あそこですと、やっぱり人の流れとして、おりた瞬間に1番大分の表玄関が見えます。ですから、そこからあっちのほうに繁華街があるのかということも連想できますし、地域にわっと出て行ってくれる可能性も随分高まるんじゃないかと思うんですよね。

いずれにしても、ご飯を食べたり、お土産買ったりということで、私ども町なかの商業エリアというのは何らかの仕事があろうかと思っておりますので、その辺の連携、人の流れということにもご配慮をぜひともいただければ。

あとは、仕掛けと仕組みに対するご理解をいただければ、もう私の次の世代、20代、30代の若手の店主が青年部におりますから、彼らがきつと暴れ回って、あのとき麻生先輩と一緒にやらかした10日間のイベントのようなおもしろいことが、きつと起きるんじゃないかと楽しみにしております。

ちょっとまだ、いっぱいごらんいただきたいものありましたが、以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

麻生委員長 ありがとうございました。

感動の話。そして、十分に準備をしていただいて、素晴らしい話をいただきました。重

ねてお礼を申し上げます。

これより意見交換に入りますが、ざっくばらんに行いたいと思います。各委員からご質疑やご意見、ご提案など何でも結構ですので、お出しただけければと思います。

藤田委員 本当にありがとうございました。今、お話を聞いているだけで感動しました。

多分、きょう今お話を聞いた委員の皆さんも同じように思われたし、このラグビーワールドカップに関する期待というか、胸の高鳴りを感じたと思います。なので、今のお話のようなことをこれからやっぱり我々議員もそうですけれども、県民の中に、本番に向けてどんどん繰り広げていかなければいけないなというような思いを1つ持ちました。

質問のほうは福浦参考人に、先ほど中学校でとられちゃうんだというお話がありましたけれども、これは全国的に中学校で中体連なりでラグビーもある地方というのがあるのかどうか、もし把握されていたらお伺いをしたいと。

それと、僕も九電出身なので、周りに結構ラグビーをやっている子が多いんですが、その子供をやっぱりラグビーをさせるときに、大分は芝生の施設が本当に少ないというふうに言っています。やっぱり芝生でやるのと砂でやるのとでは、最初にやったときの感じが痛いのか気持ちいいのかって大きく影響すると思うんですけれども、その辺、実際に子供さんを指導されていて、芝生と土のグラウンドの違いというのに、何か特徴的なことがあればお聞かせいただきたいと思います。

福浦参考人 まず、中学の件ですが、私も直接詳しいことはかかわっていませんが、全国的には、やはりラグビー自体が低迷をしていますので、もちろん中学の人口も減っています。ただ、ラグビーが盛んな県、九州でいえば福岡とか大阪、あとは神奈川とか東京とかでありますと、競技人口はかなりありまして、そういうところの特徴としては、中学校の部活としてのチームというよりは、クラブですね。大分市だと2つしかないんですけれども、そういったクラブが、例えば、うちは小学生しか教えていませんけど、そのまま中学校のクラブが継続してある、そういうような形が大部分でございます。

では、大分県内に小学生を教えているクラブが、今は8ぐらいあるんですけど、何で中学部を持たないかという、結局、小学生を教えている我々もそうですが、ボランティアで全てやっています。もちろん指導者もそれだけにつきっきりというわけにはいかないので、入れかわり立ちかわり毎週来れる人、来れない人、指導者の確保が非常にやっぱり厳しいところがあるんですよ。

小学生は週に1回の練習でそんなに勝負にこだわらなくても、ラグビーを好きになってもらう、楽しんでもらうというレベルでいいんですけれども、中学に上がると、今度はやはり勝負がかかわってくるし、強くならなくちゃいけないし、うまくならなくちゃいけない。そうなると、練習はやっぱり最低でも土日はしなくちゃいけないので、合宿をしなくちゃいけない、遠征をしなくちゃいけない、大会に参加をしなくちゃいけない、もう一気に指導者のハードルが上がるんですね。それをボランティアでやるには、大分県はまだそこは成熟していないところが非常に難しいところなんです。

福岡県なんかは、そういうシステムができていて、もともとラグビーが盛んな県ではあるんですけれども、やはりそういった形でクラブの中でもそういう指導者がたくさんいて、1つの学年に10人ぐらい指導者がおったりとか、そういうことで成り立っている。今の現状としては、大分県では必ずしもできないわけではないんですけど、一朝一夕には難しい。

だから、逆に言えば、学校単位であれば、その形も毎日の部活としてラグビーがもし組み込まれていれば、できる環境は整いやすいかなというところなんですよ。

それからもう1つの芝生の件ですが、これはもう明らかで、基本、やっぱり子供も親もけがをするのを1番恐れると。ラグビーは転んだりするのは当たり前だし、転んだときに土のグラウンドだとけがをするし、汚れるとか、今の子供は汚れることも結構嫌うんで、だから、うちのクラブにも基本雨の日とかはもちろん練習しないでし、雨で状態が悪ければ、ちょっともう余り転んだりとかするようなメニューはしないという、そういうところも配慮してやっているんですけど、やっぱり芝生だと、仮に雨が降っていても、転んでも汚れない。濡れますけど、濡れるのは子供は余り嫌がらないんですね。水たまりで遊んだりするのと一緒で。そういうので、濡れるのはいいんだけど、汚れるのとかけがをするのというのは子供も親もちょっと抵抗がある時代に入ってきているので、芝生の上でできると入りやすいのかなというところはかなりあります。

桑原委員 本当に生の声を聞かせていただいております。

森参考人にお伺いしたいんですけども、レガシーというところで、2002年のワールドカップがあったからこそ残ったものという、先ほどの商店街のイベント機能が活性化されたとかあると思いますけれども、どういったものがほかにあると。

森参考人 そうですね、あの時は本当に、先ほどの参考人のお話にもありましたが、外国人に対する免疫がやっぱりなかったと思います。ですけど、APUもできまして、それこそ、またAPUの学生さんが、そういう外国人アレルギーをすごくいい形で緩和してくれるとか、中和してくれていること。

それからあと、社会とかかわるということを日ごろからやってくれております。ですから、商店街と、それこそ大分でも芸文短大の学生さんだったり大分大学の学生さんも含めて、大学生たちが一般の社会人と一緒に交流しながら、何か事をやるというようなトレーニングというの、すごくあの当時とは全然違うんですよ。よくできています。

ですから、本当に先ほどの繰り返しですけど、こういう形にするぞという、何か本当に旗振り役の組織ができましたら、来年でもできて、そして、この前のラグビーワールドカップ、前回外国でこんな状態だったぞというところ、この前大勢の方が調査にたしかいらっしやいましたよね。ああいった情報を、お出迎えの体制はこうこうだとかいうところ、1番新しい情報がこの前の大会の情報だと思いますので、大分でこういうことが起こる可能性があるんだよという情報を出していただければ、そこからイメージが2002年の情報とかとセットになって、よっしゃ、じゃ、2019年はこういった形でやろうかという話が自然に起こると思います。

その情報開示を一刻も早くしていただければ、もうその受け入れの仕掛けといいますか、パッケージ化はできていると思いますので、レガシーはかなりいろいろあると思います。

桑原委員 土壌は前よりもむちゃくちゃいいということで。

森参考人 相当肥えてきています、はい。

桑原委員 やりようによっては、前よりもという。

森参考人 そうです。社会的な環境が随分違うというのは理解しているんです。2002年のときよりも今のほうが、やっぱり社会的な厳しさは、それも実際感じているのは確かなんですけど、派手にするということじゃなくて、心の部分でという部分では、しっかり

お出迎えできるような体制づくりができるかと思えます。

桑原委員 その観点はなかったです。ありがとうございます。

木田委員 この間、同じ大会が開かれる福岡とか熊本のほうに視察に伺ったんですけれども、その会場でスタッフから言われたのは、大分はワールドカップもサッカーも経験しているけど、ラグビーのほうは全然ないでしょうとか。やっぱり前回のサッカーのときは、もう本当に前段階が長かったですよね。七夕祭りでパレードをやったりとか、みんなが機運を高めて、県協会、市協会が連携しての当日の運営と、ボランティアもかなり動員とかもできていたような感じがしていたんですけれども、国際試合もサッカー多いですね、大分。

それで、今回、ラグビーはプロチームを大分につくるとかそういう流れでもない中で、当日の運営は大丈夫なんですかねということをお福岡のスタッフの方がおっしゃっていたんですけれども、先ほどお話伺いましたけれども、県の協会のほうで、何か今後こういったことをやらなくちゃいけないとかいうことがございましたら、植山参考人になりますかね、教えていただければと思います。

植山参考人 先ほど森参考人が言われましたように、スタジアムの中の運営は、例えば、イングランド大会のやり方をある程度ルールなりをまねていくと、言語の障壁さえ超えれば何とかかなるかなと思うんですけれども、今度は逆の発想も要ると思うんですね。

ちょっと話がずれますけれども、では、サッカーワールドカップとラグビーのワールドカップの違いは何なのか。その違いというの、競技の違いじゃなくて、性質の違いは何なのかと。これは考えておかなきゃいけないかなと思うんですね。

私は視察に行っていないんですけれども、視察に行った方に聞くと、先ほどお話聞いて、あと思ったのが、ロンドンでは花火1つ上がらない。まちの中は静かなもんだと。会場の周りではそれなりにやっているんだけどという、となると、ちょっと言葉が差別的な言葉になるんだけど、フリーガンということが出ましたけど、ラグビーファンは絶対フリーガンになりません。もっと言ってしまえば、かなり所得の高い連中が来ます。

となると、どんどん話がほかのほうに向きますが、例えば、大分に1週間いたよと言ったら、大分のまちの中だけうろろろするのか、郡部に泊ってみたいという人が出てくるのかという、ちょっと発想が違う人が来るんじゃないかなというところが出てくるので、私としては、もちろん大分のドームできちんとやることも大事なんですけど、県全体を巻き込んで、例えば、ある人は直入に泊まりたいとか、ある人は日田に泊まりたいとか、ある人は海辺のあるところ津久見だの佐伯に泊まりたいとかいう、必ず出てくると思うんですね。だから、そういうところをちゃんと組織的に運営できるか。

例えば、佐伯から大分にちゃんと連絡バスが走ってくれるのかとか、そういう泊まるところを紹介してくれるのかとか、それは、もっと卑近な例で言いますと、南アフリカでサッカーだったか覚えていないんですけど、弾丸ツアーというのがありますよね、1泊2日で帰ってくるの。あれはラグビーではあり得ません。必ずそこに長くおってもらえるので、そこをうまく生かしていく方法が、今、森参考人の話を聞きながらちょっと出てきたんですけれども、町なかだけじゃないんじゃないのかなと。郡部を巻き込んでできるんじゃないのかなと。

彼らが日本の郡部のことに関して非常に興味があつて、ちょっとばらばらに話が飛んで

いくんですけど、アメリカなんかで1番有名な日本のアニメはトトロですよ。何でトトロが有名かといったら、日本の田舎の風景が大好きなんです、アメリカ人は。別にアメリカ人に限らない、イギリス人もそうなんだけど、そういうところを引き出してあげられるおもてなしもでき得るのではないかなと。これも1つの発想の転換じゃないのかな。

森参考人 それは私らの中でも実は出ました。所得層が多分違うと、お客さんの雰囲気もきっと違うよという話ですね。

日ごろ、ここ数年観光に力を入れてというようなことで、かなり町なかにも、例えば、免税システムを入れましょうとか、通訳の仕掛けを入れましょうとかいう話とあわせて、地域観光、自分たちのまちのこと、まちというのは大分市のことではございません。大分県のこととか、もしくはもうちょっと広く日本のことを私たち自身がもうちょっとしっかりしていて、自分の言葉で外国の人たちに語っていくスキルが高まらないと、かえって外国人さんのほうが知っているんですよ。

そして、旅行の仕方もうちょっと豊かですよ。余裕がありますよね。日本人のように団地でぞろぞろとかいうことよりも、かえってもうカップルでとかいうことで、十分大分でも楽しんでいらっしゃる。

それから、観光のおもてなしの仕方も、今、まさに大分市は観光でやっていくんだぞということでここ数年頑張っていますけど、今、その蓄積段階です。そういう意味で、今回、高所得層のお客さん対応ということを学ばせていただく機会に2019年はなるといいなというふうに思って、それに備えて勉強していきます。

戸高委員 すみません、植山参考人。国際試合のマッチドクターですね、要するに今回のワールドカップのときにするんですけど、これは、例えば、大分開催の試合については、これは全国の応援をいただくんですか。それとも、この地元だとか九州内でのドクターで手配をするという形になるんですか。

植山参考人 イメージしていただくと簡単なんですけれども、今、資格を持っているのがふえてきて、40名前後だと思うんですが、そういう連中が2カ月の間で48試合ですね。48試合ですかね。（「そうです」と言う者あり）48試合全国である感じですよ。飛び回ることができません。もう大分は大分だけで何とかやっていくしかない。

例えば、福岡の連中が手伝いに来てくれるかもしれないけれども、そんなに甘えたことは言っておられない。大分にも呼ばれています。一応大分県協会に所属している人間が40名のうちの3人持っています。1人は出向して今、鹿児島県にいますけど、一応いますので、何とかかなるかなというところはありますが、それでも、3試合、4試合となったら、恐らく頭の中真っ白になっているのかなと。

ちょっと我々、サッカーのワールドカップのことを聞いてみたんですけど、どんな人が出ましたかと聞いたら、出なかったよと言われました。サッカーってほとんど出ないそうです。何かじゃ、仕事ありましたかと言ったら、1人が風邪引いて、1人が休みの間にゴルフ行って休んでいらしたらしいんですけど、その話を聞いて、これはちょっとメディカルの内容が違うなど。

ごらんになったらわかるように、ラグビーは頭が割れて当たり前のスポーツですから、それなりの覚悟でやっていかんと乗り切れんなどというところがありますから、それこそ森参考人が言うように期待しているんですけど、ドームの外は、何とかお任せしたいと。ド

ームの中は我々頑張りますよという言い方しかできないんですけれども、その中の整備さえも、ちょっとまだ混沌としていて、いろんな情報を入れなきゃいけないなというのがいっぱいありますし、先ほどちょっと触れられましたけど、F I F Aの規制があったというのも、ちょっと私も資料出しましたけど、日本協会の岩淵理事という方はケンブリッジ大学でレギュラーをとった方なんですけど、それはすごい人種差別を受けて、その中ではい上がっていったんですけれども、そういうときの抜け道というのがすごく詳しいんですね。

で、普通のやり方だったら日本は海外の有力なチームと絶対に対戦できない仕組みになっています。ティアという8チームぐらいの伝統国のチームと組むのは、もうまず不可能に近い。あるいはお情けで1試合できるかなというんだけれども、岩淵さん、いろんなコネを使って、本当に裏口じゃないんですけれども、こんな手があったかみたいな方法でやってきているので、彼の知恵なんかをかりていくと、この規制はこれが表だけれども、ここは裏だよというところがかめるんじゃないかなと。

でも、それはやっぱり情報戦ですからね、知っとくにこしたことない。もう知るか知らないかだけですから、それを戦争としたら知らないところが負けますもんね。そういう方法もやっぱりこれからいろんな方法で、各個人が頑張るのではなくて、県全体がいろんな方法でやっていくしかないのかなということを、ちょっと最近感じ始めています。ちょっと話がずれました。

戸高委員 ありがとうございます。福浦参考人の先ほどのお話を聞いて、当時、私もテレビで見えてまして、試験で間に合うか間に合わんかということで、間に合って拍手したのをよう思い出します。本当に当時のことをよく思い出しました。

今もご指導されているということなんですが、なかなか県内の、舞鶴高校、もうずっと私のころから完全に優勝して全国大会でもいいところに行くという、ずっとそれがあったんですが、ここ最近、なかなかそれができていないというところで、我々のころも、もうもちろん中等部、少年部、ラグビーなんていうのは一切なかった時代で、スクールウォーズやったですかね、スクールウォーズがテレビで出て、弱小から指導者によって変わっていくという。

それからちょっと人気が出たんですが、指導者によって強いチーム、弱いチームとか、県内では高校レベルですから差がつくんですが、今、かなりそれで差が激しくなっているというところを感じると、小さいころからの、要するに、高校レベルだけの指導者のレベルでは追いつかないのかなというのを非常に感じまして、先ほどおっしゃったように、福岡なんかは、やっぱり常に全国の上位に行っているということから考えると、今の体制だけじゃ、なかなか大分県のラグビーのレベルが上がっていかないかなとは思いますが、どうでしょう。

福浦参考人 とにかくラグビー人口がふえないことには、要するに底辺が広がらないと頂点は高くないので、たくさんの子供が、例えば、ラグビーを小学生ぐらいで始めると、その中からやっぱり運動能力がたけている子とか大きい子とか速い子とか、いろんな子がやっぱりラグビーをして、そのまま上がっていけば、高校レベルですごい選手になるし、チームとしても戦力になるということがあるんです。

今、中学生が毎年10月に選抜の九州大会というのをやっているんですけど、その選抜大会に出るための選抜チームを大分県がつくれます。中学3年生を中心に、じゃ、集め

ました。もう中学3年生が大分県内で30人ぐらいしかやっていないんですよ。で、ほとんどがもう集まって、じゃ、その中からセレクションをしましょうという話なんですけど、福岡に行くと、もう1チームに30人ぐらい中学3年生がいるわけです。それが何十チームもあって、その中から選ばれた選手が選抜チームで来る。全く選手層が違う状況なんです、今。

やっぱりある程度ジュニアの普及をすることで、競技力の向上を目指せるということにつながるので、やっぱり子供がラグビーをしたい環境、あるいはそういうプログラムなりなんなりをつくっていかないと、強化していくのもなかなか厳しいのかな。

舞鶴も今、県内では勝ちますけれども、もう全国に行ったら、しょせん勝てるか勝てないかというようになっています。他県は私学がほとんど強くなって、私学の時代になっているので、公立で勝つためには、先ほども言ったように、ある程度底辺を広げて頂点というシステムしかないのかなというような気がします。

大友副委員長 きょうは大変参考になる話、本当にありがとうございました。

私は中津なんですよ。中津というと、やっぱりラグビーというのは全く盛んでない土地なんですよ。もう全然親しみもなくて、ルールもいまだにわからないまま育ってきたわけなんですけれども、やっぱり先ほどちょっと話題になりましたけど、サッカー2002年のワールドカップと今回の大きな違いというのは、やはり中心部だけじゃなくて広域にわたるという方向性が出ています。

視察に行ったときに、余り駅周辺とか空港周辺とかというのは盛り上がりが見えなかったという話を聞いていて、中心部だけじゃない、広域だろうということで、県北のほうとかも、現時点でいったら、余りワールドカップという意識もないんですけれども、その辺をいかに機運を高めていこうかというのがテーマかなというふうに思って、私も挨拶のたびにワールドカップあるよとか、国民文化祭があるよとかいう情報を盛り込んで挨拶をさせていただいているんです。

そんな中で、森参考人が言われたように、中のことを頑張ってくれと。外のことはもう民間でしっかりやるんで安心してくれと言われるのが非常に心強いんですけれども、ぜひとも中心部だけじゃなくて民間のつながり、広域に広げていただいて、我々も当然広域で考えると。

今回、福岡、熊本も会場になっていますので、3県のみならず、県議会のほうで九州一丸となって頑張るというふうに前向きに考えていますので、民間のほうでも九州全体でつながりを持って、いろんな経験を広めていただいて、機運を高めていただきたいなというお願いでお礼にかえさせていただきます。ありがとうございます。

古手川委員外議員 たまたまこの中に、私も入れましたら県議会のラグビーワールドカップ大分開催協議会のメンバーが6人いて、味の素スタジアムに行ったり、福岡、熊本にもどういう状況か調査に行ったり、今泉さんの話を東京で聞いたり、あの2人はラグビー経験者ですが、あとは知らない人間が少しづつ今雰囲気、たまたま見ている、ああ、開催協議会のメンバーが半分いるなと思いつつながら。

ちょっと植山参考人に1つ教えていただきたいんですが、スタッフのドクターですね。これは以前から私、お話を聞いて、大分の強みだなというふうに理解をしています。それで、この体制がきちっとできれば、準々決勝を誘致するときの大きなポイントになら

ないのかなと。（「そうあってほしいです」と言う者あり）そうしたときに、先生方はお忙しい中でそういう資格を取りに行ったり研修会に行ったりという中で、やっていただいておりますのでしょうけれども、費用の面のその辺の助成というふうなことは、僕は県のほうから考えられないのかなと。仮にそういうふうなことを協会と一緒に提案をしたときに、先生方の受けとめ方というのがどうなのかなという、ちょっと教えていただきたい。

植山参考人 1点、古手川議員のご質問に答えたいことと、それから、大友副委員長にちょっとアドバイスがあるんですが、1点は、私が九州では3番目ぐらいに取ったんですけども、それまでは、ちょっと扱いとしては余りよくなかったですね。何か研究会全体も、植山なんかは手弁当で何か自分の……

古手川委員外議員 その辺の雰囲気もこの1年で私も十分に理解しております。研究会の中も理解しております。

植山参考人 何か、試験を受けているらしいぜみたいな。旅費のほか何もしてくれなかったという感じで、その次には、分藤先生という大分市賀来で開業をされている耳鼻科の先生がいる。後輩なんですけど、さすがに分藤先生が行くときは、僕も県からお金を出してやってくださいよというのは言いました。

あと、やっぱり同期なんですけど、中村というのが今、鹿児島徳洲会の副院長をしていますけど、あいつもやっぱり海外でやっとなんですけれども、あいつは自分のお金で取ったのかな。そういうのはほとんど援助なしでやってきています。自分たちでやっていきます。

で、これはちょっと発想を変えるしかないんですけども、これは実は、日本代表チームの高澤ドクターから聞いたんですが、イングランドでは、そういう一生懸命ドクターとかでやっている連中のために、チケットの優先販売。ただでやっちゃいけないので、5枚ぐらいは売ってあげますよとかをしてあげたという話は聞きました。そういうモチベーションをどこかでもらわないとですね。

というのは、私、一応国際試合の資格といっても、古手川議員はご存じですけど、県内で年間に100試合近くあるわけですよ。特に高校生、大学生、社会人、そのうちの50試合ぐらいはドクターを出しているわけ、土曜日、日曜日です。それも、言っちゃ悪いけど、本当に微々たるお金で、これで行くのみみたいなお金で行ってくれているんですけど、やっぱりそういった連中の気持ちをつなぎとめるためには、そういったやり方しかないのかなと。

例えば、今は5千円しかない交通費で、玖珠まで行ってってくれて言っているのを、3万円にしようといっても、これは意味がないことであって、そういうのを、おまえ頑張ってくれたから、優先的にこのチケットの販売権を何とかするよというのは、イングランドでは成り立ったそうです。

これは行政の力でできるかどうかはちょっと私、わかりません。わかりませんが、この前も岩渕さんが言いましたけれども、何とかなるところがあるんじゃないのかなと私は思います。

古手川委員外議員 ぜひ、その辺も引き続きいろいろご相談といいますか、お話をさせていただきながら。

植山参考人 我々も医務としては精いっぱい自分の任務を果たしていきますし、分藤先生

とも話し合っ、分藤先生は、10月には山梨にも行ってくれました。私は、今週愛媛に行ってきますけど、そのように、もう手を挙げて行きます。「手伝いますよ。」と言って。ラグビーというのは非常にいいスポーツであるとは思いますが、非常にお金に何というんですかね、厳しいというか、きれいというか、もう完全に持ち出しみたいになります。

例えば、この前、ウェールズに優勢だった日本代表チーム、あるいは秩父宮でアルゼンチンと戦った代表チーム、彼らは命がけで戦いますよ。首が折れるかもしれんように。日当が幾らだと思いませんか、日本代表チーム。4千円ですよ。そんなもんなんですよ。

もちろんジャージとか別にちゃんと買ってくれますけれども、純粹に見れば、お金くれるのはそんなもんなんです。それで彼らは命がけで体張ってやっているわけですから。まあそれを言うと、僕らもそんなにいろんなことは求められないなと思っています。けど、厳しいなと思いました、ちょっと。

それと、後でいいですけど、ちょっと私、中津のほうから聞こえてきた情報なんですけど、中津はすごいメリットを持っているんですけど、アドバンテージを生かしていないのが、慶應が中津にすごい興味を持っていますよね。

ご存じかもしれませんが、慶應高校というのがあります。慶應高校は必ず修学旅行で福澤旧居に行きます。慶應大学に声をかけると、早慶戦とまではいかないにしても、春のオープン戦で、例えば、今、日本で1番強い帝京ですか、帝京と慶應がやってくれるとかいうのは可能かもしれない。それで、しかもお金を払う必要はない。それで集客できるわけですから。それはむしろ中津市が頑張ればできることではないかなと思います。

大友副委員長 なるほど。ありがとうございます。大変参考になりました。その辺でも私も声かけをさせていただきたいと思います。

古手川委員外議員 あと委員長、もう1つ。先ほど森参考人おっしゃってまして、今、県の執行部のほうも研究しているんですけど、私ども、会派で先月香港に行きまして、香港のラグビー協会に行ってみようということで、1時間半ぐらいしか時間なかったんですけど、いろんなお話をお伺いする中で、香港セブンズというイベントですね、3月末から来年は4月の初めのようなですけども、今、県のほうで行ってくれと。ブースを出そうと。先般の一般質問でも私やらせていただいて、検討中ですということなんですけれども、もう本当に香港の1年の中の1つの大きなイベント、お祭りとして香港中が燃えるというふうな7人制のですね。

そういうときに、ブースを出してくれるはずですから、何かそれにあわせてまた開催協議会かなんかの中で、いろいろまた提案をしながら、していければいいかなというふうに思って、私も仕掛けていきますので、ぜひ森参考人たちのほうからも仕掛けていただければ。よろしくをお願いします。

森委員外議員 さっきイベントで神楽も出ていた、私も神楽を舞いますので。ただ、今回は前回に比べれば助走が短いけれども、いろんなパッケージがあるので、民間の力で何とかやっていけるよということ、その裏づけには、いろんな市とか県とかとの、あと、開催協議会との関係も重要だと思うし、先ほどあったように、南口でバスをおりて、表には来なかったというのが、そこで連携がまだ図られていない部分があるということだったんですけど、今現在の状況と、何かちょっとそういう部分で足りない部分というのが、まだ

あるのかどうかということをちょっと教えてください。

森参考人 きょう今、植山参考人のお話を聞いても、ワールドカップ、例えば、サッカーとの違いを意識した上で、おもてなしをしなきゃいけないということをもまず考えたときに、豊の国YOSAKOIまつりのスタイルが、ちょっと似ているのかなとふと思いました。

全国からたくさんチームが集まりまして、華やかなイベントですので、まちとしては、がっと一緒にタイアップしていければという形でお話もあるんですけど、案外彼ら、やっぱり自分たちがやるというか、自分たちがみんなの前で披露するというのが主であって、自分たちのやっているところを見てくれとか、外をどう巻き込むかということが組織体の中の主眼には余りない。

もしかすると、想像ですが、FIFAはかえって完全にチームと別立てでスポンサーといますか、プロモーションをかけていく仕掛けのほうが前に出ていて、そして、試合を提供するという体制のようにあるんですけど、先ほどの話で、ラグビーがもしかすると、チームチームもしくはチーム相互のというラグーマン同士の世界のほうをしっかりとつくる。

そしてあと、お客さんたちもしっかりラグビー文化をわかっている人たちが、余りちゃらちゃら観光というよりも、縁あって大分に来たことをきっかけに1人1人の目で、自分の足で大分の中を味わいながら歩くとかいうような、静かな楽しみ方を求めているのかもしれないなど、ふと想像しました。

であるとすれば、それはそれなりの切り口でこちらも観光提供しないと、さあどうぞと売り出しのような、余りお祭騒ぎのようなことばかりすると、かえって逆効果になるのかなということも今、感じましたので、あわせて勉強させてください。

古手川委員外議員 私はイングランドに行かせていただいたんで、日本の野球かなという。ただ、外国の人が外国から来ているので、その辺はちょっと違いはあるかもしれませんが、イギリスを中心にしたある意味母国に戻っているという雰囲気ของทีม編成ですから、決してヨーロッパからのじゃないんですよ。大英帝国の集まりだということ、四、五万人がすうっと来てビール飲んでわあっと騒いですうっと帰っていく、日本の野球かなと。そんなに僕らが構えて4年に1回ではなくて、もう日ごろやっているんで、大会がそこにあるよというふうな印象を持って帰ってきたんです。だから、華美なものなんて、本当何もありません。トゥイッケナムの8万人のスタジアムの周辺だけ、旗がぱたぱたと。ロンドンの町なかには、アメリカンフットボールの旗があつとありました。

それでもすうっと8万人が集まって、ファンゾーンでにぎやかにやって楽しんで、2キロ、3キロどンドン歩いて行って、またビールがぐんぐん飲んで、それで、わあわあ言いながらお互いに入り交じって観戦をして、すごい盛り上がりですね。そして、すうっと帰っていくというふうな感じだったんです。

これ、西さんたちも行っているんで、もうお話はお伺いしているけど、僕は野球かなと。もう日常のものがそこにあつて、行って帰るんだよ、当たり前だねというような。だけど、そこはまた日本流のというところを入れてもいいと思うんですよ。アジア圏で初めてやるのとか。そんな感じで、新しい形ってありだろうな。だから、香港の協会長は、アサヒビールとすしがあれば大丈夫だよと簡単明瞭で、彼も奥さんと一緒にやっぱりイングランドにも行っていますし、日本にも来ているんで、その中で、国のチームに対してついてくるファンと、一般的なラグビーファンと2通りの形があつて、だから、対戦国が決まった

ときに、言語とかも含めて、基本は英語なんでしょうけれども、言語対策だとか、そういう形である程度大分に来るチームが決まったときに、そういう対応でもいいんじゃないの。今一生懸命こうだ、こうだと言っても、これだけ多彩な国が来るので、というふうなアドバイスもいただいたんです。

藤田委員 1つだけお願いをさせていただきたいと思います。実はラグビーワールドカップ前年の国民文化祭、そして翌年の東京オリンピックに向けて、今、我々の酒好きの議員でセントポルタの中に、大分の地酒と地焼酎の展示館をつくろうと思っています。クレープ屋さんの空き店舗がありますよね。（「はいはい」と言う者あり）あそこを今、お借りしてやろうと思っているので、（「それはそれは、ありがとうございます」と言う者あり）麻生先輩も含めてご指導、ご援助をよろしく。

森参考人 それはぜひよろしくをお願いします。

古手川委員外議員 この前、この2人は、僕らの前の香港にお酒の販売のお手伝いにちょっと来てもらったから。

麻生委員長 それでは一言お礼を申し上げたいと思います。

ちょうど予定の時間となりましたので、重ねて、きょうは本当に年末のお忙しい中にもかかわりませずお越しいただきまして、ありがとうございます。この時期にこういう形でざっくばらんにいろんな問題点の整理ができたのではないかなと思います。

恐らく県庁の役所を相手にお話をされると、なかなかざっくばらんな話がやりづらいらうなと思ひまして、私どものほうが議会がワンクッション置くことによって、むしろしっかり中村国際スポーツ誘致・推進室長も含めて県庁の担当もおるといふ、こういう形でできたのがよかったのではないかなと思います。

何点か整理をさせていただきますと、植山参考人がおっしゃっておられましたように、マッチドクターの育成とか、そういった協会の内部の人材育成と、こういった部分で、ラグビー文化の中で行政ができる部分とやったほうがいい部分とそうじゃない部分とかいろいろあるでしょうから、そういった課題については明確に打ち出しながら、協会もその部分を強化していくということが重要になってくるでしょうし、何よりも、ほかとの連携も含めて国際大会を早くやらないといけないなということを感じたところであります。

高澤先生との個人的なおつながりとか、植山参考人のお力によって、早い段階で岩淵さんを大分にお招きいただいた、そのご尽力に本当に感謝したいなど。このご縁を大事にしながら、国際大会をとにかく呼んでくるとか、さっきの慶應の話とか、こういった部分で、検証できるような大会を幾つか大分で2019年までにやる必要があるということを感じたところであります。

また、福浦参考人からのお話の中では、やっぱり大会を盛り上げるためには、ジュニアの育成とか、舞鶴に頑張ってもらいたいとか、東明高校に頑張ってもらいたいとか、そういった環境をどうつくっていくか。その底辺になって、今後のレガシーの部分では、特別支援学校の学校のグラウンドも芝生を進めているんですが、あれは将来的には小中学校の義務教育課程の学校のグラウンドも芝生にすると、それを前提に、モデルケースとして、試験としてやって、効果は上がっているわけですから、我々としても、またそういった部分についての財源とか、いかにコストを安くしてやっていくかということにも取り組まなければならないなと思ひましたが、何よりも大会までに松任谷由実さんと福浦参考人のシンポジウムと

かいうものを、大銀ドームで多分大分協会のトップリーグあるいは国際大会のときに、なぜか福浦参考人が出ているとか、ユーミンが出てきたというような、こういった情報発信の仕方も、これはストーリー性のある部分で大事だなということを痛感したところであります。

そして、森参考人におかれましては、あの2002年のサッカーのときも、県警のほうで、同じ人間が責任を持って10日間おらんと許可出さんとか言ったのを先ほど思い出したところでありますが、そういった部分については、少し緩和するとかいうことも大事でしょうし、先ほど植山参考人がおっしゃったマッチドクター、できればレガシーを残すためには、大分の関係者の方々を中心に笛も吹いていただいて、次の指導に生かしていただく。

そのためには、当然サッカーの2002年のときもそうだったんですが、青年会議所のおもてなしブースに10日間責任者で名前を出した人間は、大分の大会で、1度もスタジアムに足を運べなかったという、そんな方がたくさんいらっしゃいました。そんな中から、大分のJ Cの2人には、じゃ、決勝戦のチケットを調達しようやないかということで、こっそりそういったのをあの当時、実はやっちゃったということもございましたので、そういうようなことも、先ほどの植山参考人のあのお話というのは、当然、全国の中でも、そういった方々が決勝戦ぐらいは見れるとか、どこかのそういったチケットについては、当然お金は自分たちで払いましたけれども、その枠をとっておくというのは、岩渕マネジャーとワールドラグビー本部との関係にも、しっかりと今から根回しをして交渉しておくことによって、乗り切れるんじゃないかなと、このように思った次第であります。

いろんな課題がありましたが、きょうこれを機会に、うちの中村国際スポーツ誘致・推進室長が一生懸命頑張って、大成功に導くような形で取り組まさせていただければと思っております。

1番の課題は、やっぱり変えることができないことを変えるための着眼点と発想の転換を我々もしながら、連携を図りながら、越えられないことはないという気概を持って、組織的に体制整備、応援が県議会としてもできればと、このように思っておりますので、これからのご協力をよろしくお願い申し上げます、お礼にかえさせていただきます。きょうは本当にありがとうございました。

それでは、以上をもちまして本日の委員会を終わります。